

論文名 : Clinical Significance of Extramural Tumor Deposits in the Lateral Pelvic Lymph Node Area in Low Rectal Cancer: A Retrospective Study at Two Institutions.

(下部直腸癌における側方リンパ節領域のリンパ節構造を伴わない壁外非連続性癌進展病巣の臨床的意義 : 2施設における後方視的研究)

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 八木 亮磨

(以下要約を記入する)

【目的】

側方リンパ節領域（側方領域）におけるリンパ節構造のない壁外非連続性癌進展病巣（LP-EX）の臨床的意義を明らかとし、LP-EXが下部直腸癌患者の予後に与える影響について検討する。

【対象と方法】

側方郭清を伴う治癒切除を施行された pStageII, III の下部直腸腺癌 172 例を対象とした。対象患者は側方領域の転移の状態に基づき、側方領域に転移がない群（no LP-M 群）、側方領域にリンパ節転移のみを認める群（LP-LNM 群）、側方領域に EX を認める群（LP-EX 群）の 3 群に分類し、これらの 3 群間で臨床病理学的因子について後方視的に統計解析を行った。

【結果】

5 年全生存率は no LP-M 群が 80.3%、LP-LNM 群が 61.1%、LP-EX 群が 34.9%であった。5 年無再発生存率は、no LP-M 群が 62.2%、LP-LNM 群が 33.8%、LP-EX 群が 14.3%であった。全生存および無再発生存についての多変量解析では、LP-EX が独立した予後不良因子として選択された。

【考察】

本研究により、下部直腸癌において LP-EX が独立した予後不良因子であること、また LP-EX の有無によって層別化が可能であることの 2 点を明らかにした。LP-EX は直腸癌の個別化治療選択の重要な指標になり得る。

【結論】

LP-EX は側方領域に転移を有する患者を層別化する、簡便で優れた病理組織学的指標である。